

# 第 70 号

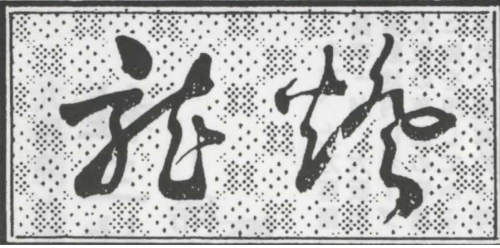
大阪市史跡 龍溪禪師墓所 靈龜山 九島院

〒550-0022 大阪市西区本田3丁目4番18号  
Tel 06 (6583) 2725 FAX 06 (6583) 0908

発行所

発行者

第廿五代住職 奥田 啓知 (智證)



当院は、阪神ならば線で、ならばから7分です。

## 週刊朝日の連載問題

### 親の因果が子に報い？

日本維新の会代表の橋下徹大阪市長の出自をたどり「ハシシタ 奴の本性」という連載記事は、橋下氏が親会社の朝日新聞も巻き込んで批判を展開、翌日同紙は連載中止と謝罪記事を掲載しました。

朝日新聞も「週刊朝日が今回不適切な記述で橋下市長をはじめ、多くの方々にご迷惑をおかけしたことを深刻に受け止めている」などとするコメントを出し、全面的に謝罪しました。

橋下市長の父親が同和地区出身で、「やくざ」活動をしていたなどと言及し、表紙には「橋下徹のDNAをさかのぼり本性をあぶりだす」との見出しで、まさにトイレの差別落書きのような嫌な気持ちを抱きました。橋下市長は本人と関係のない出自で人を判断するのは、血脈主義、身分制につながる恐ろしい考え方だと怒りをあらわにしました。

同和差別など人権を厳しく追求してきた、天下の朝日新聞の系列会社が、このような報道を許したことに、深い憤りを禁じえません。

さて「親の因果が子に報い」という諺がありますが、仏教では、「自業自得」といって他人の業（行為）の結果が自分にまわってくるということなど、あり得ないと言っています。

「因果」とは「原因」と「結果」のことで、「誰かが何かを行えば、必ずその本人にその行為の結果がふりかかる」ということなのです。自分のやったことの報いは自分が受ける、つまり、「自業自得」が本すじであり、たとえ親子といえども、親がやったことの報いを子がうけることはありえません。

インドにはカースト制度という身分制度がありましたが、お釈迦さまはカースト制に反対されていました。お釈迦さまは、「家柄によって婆羅門なのではない。家柄によって婆羅門なのではない。行為によって婆羅門なのだ。行為によって非婆羅門なのだ。」（スッタニパータ）

この場合の婆羅門とは、「あらゆる束縛を断ち切り、恐れることなく、執着を超越し、こだわりのない者、



その人をわたしは婆羅門と呼ぶ」、「智慧深く、聡明でありさまざまな道に通達し、最高の目標に到達している者、その人をわたしは婆羅門と呼ぶ」（同上）と言っています。仏教には人間に対する差別はありません。人間に対する評価はその人の行為によってのみはかられるのです。

週刊誌が売れば、何を言ってもいいのでしょうか。言論・表現の自由があるからといって言っていることと悪いことがあります。この報道によって傷つかれた橋下氏のご家族や関連する多くの方々の心情を察するにあまりありません。

二度とこのような報道がおこなわれないよう、朝日新聞出版社は第三者検証委員会を検討して、全てを公表してほしい。

# 波濤の夢

(龍溪禪師一代記) その十一

龍溪と隠元禪師⑦

## 黄檗山萬福寺の開創・慶瑞寺の復興・九島院の開創

黄檗山萬福寺が開創された寛文元年(一六六一)は龍溪六十歳の還暦にあたり、龍溪にとつては祝寿が重なり記念すべき年であった。同年閏八月二十九日、隠元一行は普門寺をあとにし、工事なかばの黄檗山萬福寺に晋山した。ここに鎌倉時代以来絶えてなかった新規宗派が開立され、臨済正宗の新教団である臨済宗黄檗派が誕生することとなった。

この年には、摂州嶋上郡富田庄の古蹟『景瑞寺』が村中より寄進され、龍溪に中興を請われた。景瑞寺は、持統天皇朱鳥八年(六九四)に、宇治橋をかけたことで知られる道照法師(六二九〜七〇〇)の開基で、法相宗であった。中世兵乱の為に荒廃し松林のみになった処に、応永年中(一一三四〜一四二七)松岩禪師が中興住職し『景瑞庵』と号したが、その後廃頽し時には無住の廢庵となつたこともあり、龍溪に再興を請われたものである。翌二年には、方丈・庫裡・諸寮舎を建立し、寺号を祥雲山慶瑞寺と改め、開創なつた黄檗山萬福寺の中核末寺となつた。

また、この年には、黄檗山創建の援助者であつた前大老酒井忠勝が没し、遺言により黄金千両が寄進され、寺地の造成に充てられた。また、龍溪にとつて最後の江戸往還を行い、十二月一日帰山し、隠元の祝国開堂の令旨を伝えた。

翌三年一月十五日に京都所司代牧野親成や諸山の碩徳参集のもとに盛大な祝国開堂が行われ、祝聖をおえた三月には將軍家綱より寺領四百石が寄せられ、萬福寺の経済基盤が確立することとなった。同年の冬安居には、参堂の雲水が五百人を数え、前後に両堂を分け、木庵と即非が首座、龍溪と独湛が西堂となり、隠元の法化を助けた。この安居中には第一回の黄檗三壇戒会が開かれ、龍溪を含め受戒者数百人であった。

寛文三年(一六六三)は龍溪の弟子たちが廢寺を復興し、慶瑞寺の末寺七ヶ寺を形成した。龍溪の高弟拙道の弟子雷軒の正興寺、龍溪弟子の松山宗珊の宝積寺、富田清水家の当主、清水性榮居士とその子息で龍溪弟子の悠然の長福寺、その他全く史料の残存しない宝寿庵、見性庵、

千手庵にならんで、九嶋庵があり、慶瑞寺常住願状控が残っている。九嶋院については、慶瑞寺三代住持の永泰正眞(一六五二?〜一七二一)が本山萬福寺へ届出した書状が慶瑞寺に残っている。それによると、摂州西成郡九条嶋村九嶋庵は寛文三年癸卯年建立され、開基は龍溪禪師。年貢地四畝式拾歩と記されており、元禄五年壬申月日、富田慶瑞寺住持永泰とある。九嶋院は、『九条村絵図』に「屋舖五歩、興禪庵大随」とある古跡を、当地を開発した幕吏香西哲雲、土豪の池島一吉らが、衢壞島開発に際して、龍溪の高弟の拙道道徴(一六一七〜一六七〇)を招き、新田鎮護と五穀豊穰を祈念して祈祷道場として開堂したものである。

龍溪は寛文四年正月十九日、後水尾法皇の勅願寺、近江蒲生郡松尾村日野の法輪山正明寺の檀越に請われて入寺した。正明寺は聖徳太子が創建した名刹であるが、南北朝から室町時代の兵乱によって廢寺同様になつていた。

同寺は正保年間に、後水尾法皇の帰依を受け信任の厚かつた永源寺の一絲文守(一六〇八〜一六四六)が復興しつつあつたが、その工事なかばにして正保三年に遷化した。その後、妙心寺の僧が住持していたが、後水尾法皇の帰依を受けていた龍溪が招請された。

正明寺に赴くにあたり、隠元は龍溪を呼んで、扠子を出し、「只だこ

の一派竜池より流れて黄檗に至る。老僧三十年用い尽くさず。今汝に付す。能く行持せば竜の水を得るが如く、水の竜を得るが如くならん。只だ波をおこして作さざる一句の如き、作麼生か道わん」と言つた。龍溪は扠子を持って、「竜王多少の風をか消得ず」と答えた。隠元は、「竜池真の正脈を接得して、霖と為り、雨となつて山川に偏ねし」と言つた。龍溪は「喝」と言つた。隠元は「一声の霹靂震宇を轟かす。泥竜を驚起して九天に上らしむ」といい、『龍溪の一脈江村に灌ぐ蓮苑花開いて吾道存す 大事因縁世界に現ず 風雲際会乾坤に震う 十年全体床座となる 此の日頭をあげて禹門を出ず 大器天下の望みに孤かず 正明に法を弘めて法恩に報いよ』という偈を与え、遂に龍溪は隠元の法を嗣いだ。龍溪六十三歳、この日をもって宗潜を性潜と改めた。隠元に傾倒し、九年に亘る参禪の結果の改衣改宗であつた。

妙心寺では翌五年七月壁書を補正し他山に掛塔し衣体を変じ、法名を変えらるなどは、師恩を忘れ寺恩を失するとして、本山に還えることを禁じた。これにより龍溪は妙心寺・龍安寺の世代から除かれることとなつた。

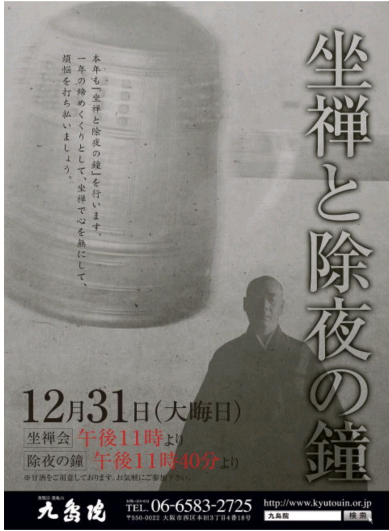


撰津名所図会の九島院

当院は、阪神なれば線で、なんばから7分です。

### 坐禅と除夜の鐘

恒例となりました、  
『坐禅と除夜の鐘』を行います。  
12月31日(大晦日)  
坐禅 午後11時  
除夜の鐘 午後11時40分



## 第十八回 修養会 報告



# 檀信徒の皆さまへ



開催日 十一月三日(土)  
天気 快晴  
参加者 三十六名

秋晴れの最高の天気の中、曹洞宗菽の寺東光院を拝聴し、村山廣甫住職の法話を拝聴。バスにて移動し、伏尾温泉不死王閣でゆつくり昼食。午後からは、近辺にある真言宗久安寺を散策し、十六時過ぎには解散。のんびりとした小旅行を楽しめました。

来年の予定は未定ですが、檀信徒皆様のたくさんのご参加をお待ちしています。  
(副住職)

## 行事報告

8/19 水灯会(お施餓鬼法要)  
参加者 40名

8/22 地藏盆子ども会  
参加者 40名

8/23 大亀地藏尊 地藏盆回向  
参加者 10名

9/29 写経会  
参加者 10名

10/27 お寺deヨガ  
参加者 21名

## 行事予定

12/31 坐禅と除夜の鐘

2/11 写経と精進料理の夕べ  
(主催・大阪市仏教青年会)

4天王寺客殿を利用しての写経会です。参加費三千元。

3/23 山門会(春のお彼岸法要)

4月花まつりヨガ(予定)  
詳細は、次号にて。

4/8 花まつり甘茶接待(西区仏教会)  
九条駅前での花まつり甘茶接待。

## ☆だるま堂建築の中間報告☆

境内隣接地(東側)にだるま堂の建築工事を始めました。

9/27 : 地鎮祭 10/1より着工

11/8 : 鉄骨の組み立て開始

11/10 上棟式を実施

工事期間中は、参詣の駐車スペース不足になります。春のお彼岸法要(山門会)にてお披露目を行う予定でございます。何卒、ご協力よろしくお願いたします。

## 平成25年 年忌早見表

| 年 忌 早 見 表 |       |      |       |
|-----------|-------|------|-------|
| 年 忌       | 寂 年   | 年 忌  | 寂 年   |
| 1周年       | 平成24年 | 17回忌 | 平成9年  |
| 3回忌       | 平成23年 | 25回忌 | 平成元年  |
| 7回忌       | 平成19年 | 33回忌 | 昭和56年 |
| 13回忌      | 平成13年 | 50回忌 | 昭和39年 |

facebook (フェイスブック) はじめました。ご覧ください。

墓地維持費のご納付をお願いします。墓参りの折、郵便振込みでも結構です。

九条から阪神三宮駅・近鉄奈良駅まで直通電車が走っています!

### 奉納便り

○金壹百萬円御寄進(平成廿四年九月一日)

小林陽子様より、だるま堂建設にご寄付頂きました。今回はご寄付のお願いはしておりませんが、折角の申し出ですので、有り難く拝受させていただきますました。ご芳名をご本尊だるま座像に記し、永代顕彰させていただきます。

### 編集後記

▼当院開創時よりの筆頭総代の一柳家の月参りでは、毎回、銅の茶托に螢茶碗で煎茶をた

していただきます。

▼当家は分家筋ですが、分家初代の常次郎氏が本家より拝領されたものだそう、先々代榮忠和尚より弘忠、啓知と副住職の4代にわたって、同じ茶碗で接待を受けています。

▼来年、当院は開創より三百五十年にあたります。当院の開創は長らく不詳でしたが、ご開山龍溪禪師の三百三十年忌に、本寺慶瑞寺が出版した図録で大本山萬福寺へ提出した古文書にその事実が判明しました(龍燈33号)▼この記念すべき新年、戦災により手放して

いた土地の半分が復領し、同所に『だるま堂』が建築されます。

▼浮き沈みはありましたが創建以来二十五代にわたって代々の住職が、檀信徒の皆様方のご援助を賜り、九島院を護持してこられました。▼禅宗初祖の達磨大師は、だるまさんとして雪だるま、起上がり小法師など庶民のなかにとけこみ、「七転八起」「不撓不屈」のシンボルとなっています。

▼開創三百五十年、連綿として伝わる法燈を絶やすことなく、一柳家の螢茶碗のように受け継いでいく所存です。

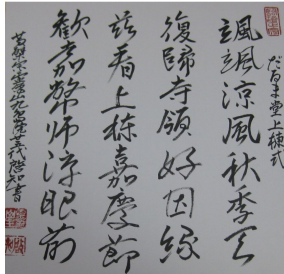
(住職記す)

### ● 人生の生まれた意味 ●

今春、歌舞伎役者の市川亀次郎さん(36)が四代目市川猿之助を、人気俳優の香川照之さん(46)が九代目市川中車を襲名し、歌舞伎の初舞台を踏みました。中車さんは襲名披露口上で、両親の離婚で45年間断絶していた父親三代目猿之助との復縁した経過を述べたあと、「140年続いてきた澤瀉屋(おもだかや)の名跡を嗣ぐのが僕の人生、僕の生まれた意味、生涯かけて精進し、責任をもって務めさせて頂きたい」と挨拶しました。伝統を受け継ぐとは、それぞれの世代がその置かれた立場を理解し、いちずに責任をもって精進し、次代にその伝統を引きわたさねばなりません。お寺も同様です。拙寺も、小生で25代目。代々の住職がその気持ちを持てばこそ、檀信徒の方々のご法援を頂きつつ今に続いてきたのです。寛文3年(1663)創建より349年、来年は350年の慶事を迎えます。その長き法燈を受け継いできたのです。

既報のように、昨年所得した隣家跡地の駐車場に『だるま堂』を建設しています。9月27日に地鎮祭を済ませ、この11月(現行執筆日以降)には、上棟式を挙行します。だるま堂は、鉄骨3階建てで、一階は車4台の駐車スペースと身障者用の便所、二階は住職夫婦の隠居所、三階は禅宗初祖達磨大師を祀る『だるま堂』を新設し、少人数の法要その他に供するものです。もともと、同地は戦前の九島院の境外地で、借家をもっていました。先の大東亜戦争で灰塵に帰した本堂の再建費用の一部にするため、先々代榮忠和尚と先代弘忠和尚が、泣く泣く手放したもので、今回縁あって復領したものです。

上棟式の香語を載せました。小生も、微力ながらも、生まれてきた意味を噛みしめながら精進しています。



上棟式香語 住職書

### お知らせ

### ◎ のほり奉納の募集 ◎

1 旗 金 2 千 円

『南無観世音菩薩のほり』を入れ替えます。一年間境内に掲げます。昨年同様、お施主さんを募集いたします。為書きと施主名を墨書します。ご希望の方は、寺務所まで、お声をかけてください。

墓地維持費のご納付をお願いします。墓参りの折、郵便振込みでも結構です。

九条から阪神三宮駅・近鉄奈良駅まで直通電車が走ります!